

# シルバー人材センターにおける重篤事故の発生状況と要因 —10年間の重篤事故報告資料の分析を通じて—



ダイヤ高齢社会研究財団 研究員 修士(老年学) 森下 久美

## ■はじめに

高齢期の就業は、多面的な健康維持効果が期待される一方で、労働災害の高い発生率や、傷害が重篤化しやすいことが指摘されている<sup>1)</sup>。地域の60歳以上の高齢者に対して、エイジレスな就業機会を提供するシルバー人材センター（以下、SC）も例外ではない<sup>2)</sup>。

SCでの就業は、仕事の完成に対して報酬が支払われる業務の請負・委任が主であり、労働関係法令が定める「労働者」に該当しないために、労働安全衛生法が適用されない<sup>3)</sup>。そのため会員はシルバー人材センター団体傷害保険（以下、SC保険）に加入している。SC保険が適用された就業に係る事故件数は、2014年度で4,638件、2018年度で4,656件と横ばい状態である<sup>4)</sup>。こうした状況で、全国シルバー人材センター事業協会（以下、全シ協）は、就業時・就業途上に発生した、死亡または6か月以上の入院に至った事故（以下、重篤事故）の防止を重点課題とし、SCが提出する重篤事故報告書（図表1）により事故状況を把握し、安全衛生教育に関する研究会や教材作成に活用している。SCにおいても、就業現場の巡回パトロー

ルの定期実施や、警察署協力のもと交通安全教室を開催するなど、地道な努力を積み重ねている。しかしながら、重篤事故は増減を繰り返し、その増加に歯止めはかかっておらず、具体的な対策の検討が急務である。

## ■研究概要

ダイヤ財団は、SC会員への効果的な事故防止策を検討するために、2019年から「シルバー人材センターの就業における事故に関する研究事業」を全シ協とスタートさせた。本稿では、直近の重篤事故の発生状況と要因を整理した成果の一部を紹介する。

分析データは、全シ協が保有する2009年度～2018年度の「重篤事故報告」のうち、請負・委任による事例427件（就業時273件、就業途上154件）である。分析は、事故の発生状況の記述統計と会員千人あたりの重篤事故件数の比率（以下、事故発生率）の算出、「事故の状況・要因」に関する自由記述データのカテゴリー、サブカテゴリー、コード化を行った。

## ■研究結果と考察

### （1）就業中の重篤事故

就業中の事故発生率は、男性、75歳以上層、長期在籍層、「技能群」従事者で高かった（図表2）。男性が女性よりも事故発生率が高いことは、先行研究の結果を支持している<sup>5)</sup>。SCでの就業内容は、性別で大きく異なり、男性では「技能群」に含まれる高所での植木の剪定作業や屋外での管理業務など、相対的に被災リスクの高い業務が多く、このことが女性よりも事故発生率が高い一因であると考えられた<sup>6)</sup>。

年齢階層では、75歳以上を境に事故発生率が上昇した。この背景には、加齢に伴う心身機能の低下による影響が考えられた。2021年改正高齢者雇用安定法の施行により、70歳までの雇用等を行う企業の増加に伴い、SCへの新規入会者もさらに高齢化が進展すると考えられ、後期高齢層の健康度を考慮した安全衛生管理体制の検討は急務といえる。特に、身体的平衡性は老化による低下が顕著であり、事故の型で最多の「墜落・転落」の原因となることから、身体的平衡性を含む体力チェックの実施は不可欠だろう。

長期在籍層で事故発生率が高い理由としては、在籍年数が長いほど会員の年齢が高くなる影響も考えられるが、発生要因として【保護具、服装の欠陥】が全体の6割を占めることから（図表3）、慣れや危険軽視が潜在している可能性も指摘できる。今後は、ベテラン層への再教育および、体力の低下がみられる場合には指導者側にまわるなど、役割の転換を通じた作業負荷のコントロールが重要となるだろう。

図表1 重篤事故報告書の様式（一部抜粋）

様式 重篤事故報告書		平成 年 月 日	
		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ 連合	
		○ ○ ○ シルバー人材センター	
		報告者職氏名 ○ ○ ○ ○	
① 会員	氏名	住所	
	年齢 歳	性別 男・女	入会 昭和・平成 年 月 日
② 事故発生日時	平成 年 月 日 ( ) 午前・午後 時 頃		
③ 事故発生場所			
④ 事故の分類	I 作業の種類		
	II 事故の型の分類		
	III 起因物		
	IV 不安全な状態の分類		
	V 不安全な行動の分類		
⑤ 事故発生の状況及び原因			
⑥ 傷害の程度	1. 死亡 2. 入院(見込 日)		
⑦ 傷害の名称	・ 傷病名		・ 傷害の部位
	・ 病院名		・ TEL ( )
⑧ 病院	・ 住所		
	⑨ センターが提供した仕事の内容		
⑩ センターから指定された場所			
⑪ 仕事の提供を受けた期間	平成 年 月 日～ 年 月 日		
⑫ 認定の内容	1. 就業中 2. 就業場所と住居の往復中 3. 総会・講習会等の出席及び往復中		

発生要因では、【保護具、服装の欠陥】に次いで、【部外的・自然的に不安定な状態】が多かった。これは作業環境がSCの管轄外かつ流動的という、SCの請負・委任の就業形態における特徴といえるだろう。植木の剪定作業を含む「技能群」や、屋外の清掃作業を含む「一般作業群」における作業環境の多く

が、個人宅の庭や公園であるため、＜不安定な足場・地面＞といったハード面への介入は難しい。現状、SCでは、仕事の受注時に安全性が確認できない場合には受注を断るよう留意しているが、突然の＜天候不良＞などについては会員の判断によるため、作業の中止を含む、会員への危機管理能力の育成も今後注力すべきである。

図表 2 就業中の重篤事故の発生状況と事故発生率

	n	( % )	事故発生率 <sup>2)</sup>	
性別	男性	253	( 92.7% )	0.051
	女性	20	( 7.3% )	0.008
年齢階層	60-64 歳	12	( 4.4% )	0.019
	65-69 歳	47	( 17.2% )	0.020
	70-74 歳	91	( 33.3% )	0.037
	75-79 歳	91	( 33.3% )	0.065
	80 歳以上	32	( 11.7% )	0.060
在籍年数 <sup>1)</sup>	1 年未満	21	( 7.7% )	0.022
	1 年以上 6 年未満	88	( 32.2% )	0.026
	6 年以上 10 年未満	87	( 31.9% )	0.056
	10 年以上	76	( 27.8% )	0.051
	不明	1	( 0.4% )	-
職群(主な仕事)	技能群(植木・造園工事等)	152	( 55.7% )	1.073
	一般作業群(屋内外清掃等)	88	( 32.2% )	0.147
	サービス群(安全指導等)	6	( 2.2% )	0.017
	技術群(各種自動車運転等)	3	( 1.1% )	0.001
	管理群(施設管理等)	11	( 4.0% )	0.020
	折衝外交(配達・集配等)	12	( 4.4% )	0.150
	不明	1	( 0.4% )	-
	傷害の程度	6 か月以上の入院	90	( 33.0% )
死亡	183	( 67.0% )	0.025	
事故の型	墜落・転落	178	( 65.2% )	-
	転倒	26	( 9.5% )	-
	激突	4	( 1.5% )	-
	飛来・落下	6	( 2.2% )	-
	崩壊・倒壊	2	( 0.7% )	-
	激突され	7	( 2.6% )	-
	挟まれ/巻き込まれ	6	( 2.2% )	-
	切れ・こすれ	6	( 2.2% )	-
	おぼれ	3	( 1.1% )	-
	高温・低温の物との接触	4	( 1.5% )	-
	火災	1	( 0.4% )	-
	交通事故_道路	21	( 7.7% )	-
	蜂・犬・蛇等に刺され・噛まれ	6	( 2.2% )	-
	その他	3	( 1.1% )	-

1) 事故発生日と入会日の差を算出。

2) 10 年間に発生した重篤事故件数の SC 会員千人当たりの年平均を示す。

本研究において、【生理的要因】に起因した事故は 10 件と少なかったが、これは会員の健康度を十分把握することが難しい SC の健康管理体制を反映しているものと考えられた。先述の通り、SC は労働安全衛生法による健康診断が義務化されていないため、現状の健康管理は、入会時の簡易な健康調査アンケートと、市区町村健診等の受診勧奨にとどまっている。先行研究では、高齢就業者の低い身体機能<sup>7)</sup> および、身体機能と仕事における身体的作業負荷のミスマッチ<sup>7)</sup> が事故発生リスクを高めることが報告されている。したがって今後は、定期的な体力チェックや就業前後の体調チェックに加え、身体機能を考慮し仕事内容を選択できる仕組みも必要だろう。

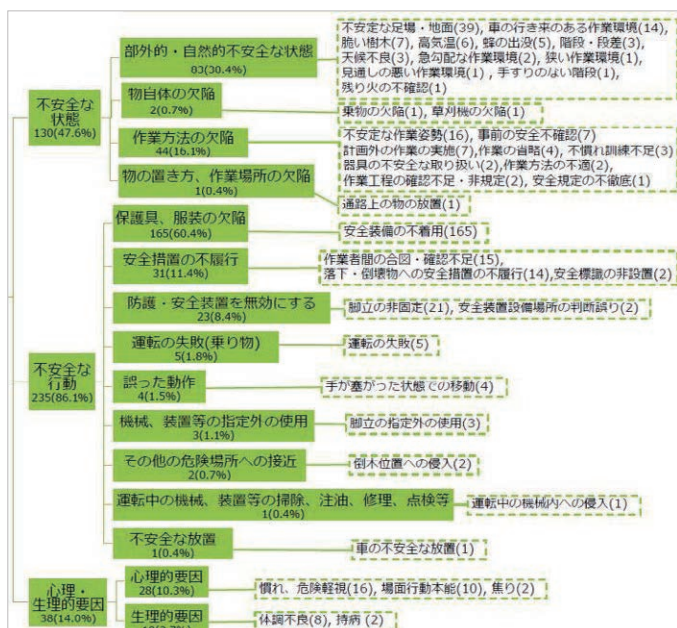
傷害の程度をみると、死亡の事故発生率は 0.025 であった。厚生労働省の 2018 年「死亡災害報告」によれば、60 歳以上層の死亡事故発生率は 0.025 であり<sup>8)</sup>、本結果と同等であった。SC での就業は、一般労働に比べ相対的に軽易な作業が主であるが、年齢構成比が大きく異なる。2018 年の統計によれば、一般労働は 60-64 歳が 38.1%、65-69 歳が 31.8%、70 歳以上が 30.1% であり<sup>9)</sup>、一方 SC は 60-64 歳が 4.7%、65-69 歳が 24.0%、70 歳以上が 71.2% と<sup>4)</sup>、SC の会員は 70 歳以上が中心となる。つまり、軽易な作業であっても、就業者のダメージに対する回復力が低いために、重篤な事故に結びつきやすい可能性が示唆された。今後は、後期高齢層の健康度を考慮した働き方を検討するために、主要な仕事の作業強度を把握することも必要だろう。

## (2) 就業途上の重篤事故

就業途上の事故発生率は、女性、高齢層、長期在籍層で高かった(図表 4)。事故の型の約 7 割が第三者の関与がある交通事故であることから、被災者の属性が被災リスクを高めたかは、本研究結果からは明らかにできない。しかし、全日本交通安全協会によれば、2018 年の交通死亡事故は、高齢者および、歩行者、自転車乗用者で多く、高齢の歩行者による、横断禁止場所や横断歩道付近での横断歩道を利用しない横断の割合が高いことが報告されている<sup>10)</sup>。SC の就業場所の多くは地域密着型であり、徒歩や自転車にて通勤する会員が多いことから、会員への交通安全教育を継続的に実施する意義は高いだろう。その際には、視覚情報の処理や注意力などの認知機能の低下が、危険な運転行動につながるなど、加齢に伴う機能低下に関する啓発も重要となるだろう。一部の SC では、こうした機能低下によるリスクを管理するために、年齢により二輪車および自動車での通勤を制限しているが、年齢では個人差が大きいと、健康度の客観的な評価に基づき、自転車を含む車両の運転による通勤の制限、もしくは徒歩で通勤できる近場での仕事を提供すべきだろう。

傷害の程度では「死亡」の事故発生率(0.015)が「6か月以上

図表 3 就業中の重篤事故の発生要因



の入院」よりも高かった。労働災害統計には就業途上の死傷者が含まれていないため、「平成30年度労働者災害補償保険事業年報」を参照すると、就業途上の事故における葬祭料給付件数は88件、事故発生率は0.002であった<sup>8)</sup>。このことから、SC会員の就業途上の「死亡」事故は、若年層を含む一般労働者よりも約7倍高値であることが示された。一般的に、交通事故における致死率は高齢者で高く<sup>8)</sup>、本結果も同様の結果であった。

発生要因では、＜交通安全施設不備＞や＜視界障害＞を含む環境的要因が半数近く認められたことから(図表5)、すでに一部SCで実施されている、事故多発エリアのロードマップの作成も有益だろう。なお、本分析では、個人情報保護の観点から、

事故の発生場所を供与データベースから除外している。今後は地域ごとの特徴を検討することも求められるだろう。

## ■おわりに：今後の展望

本研究では、シルバー人材センターにおける、直近10年間の重篤事故の発生状況および要因を整理した。2009年度から2018年度の10年間に於ける重篤事故の内訳は、就業中273件、就業途上154件であり、就業途上の事故が約4割と、比重が大きいことが明らかとなった。就業中の重篤事故では、男性、75歳以上層、長期在籍層、「技能群」従事者で事故発生率が高く、約6割の事故が【保護具、服装の欠陥】に起因するものであった。就業途上の事故は、女性、高齢層、長期在籍層で事故発生率が高く、その多くは第三者が関与する交通事故であり、【環境的要因】に起因するものであった。

今後は、上記研究結果をもとに、SC事務局職員や会員、産業医等の専門家に対するインタビュー調査を行い、事故のより詳細な発生状況や要因を確認する予定である。さらに2021年度より、上記研究では扱われなかった、より軽微な事故事例を含む「SC保険適用データ」の分析を全シ協と共同でスタートしており、SCにおける事故のより包括的な知見の獲得が期待される。

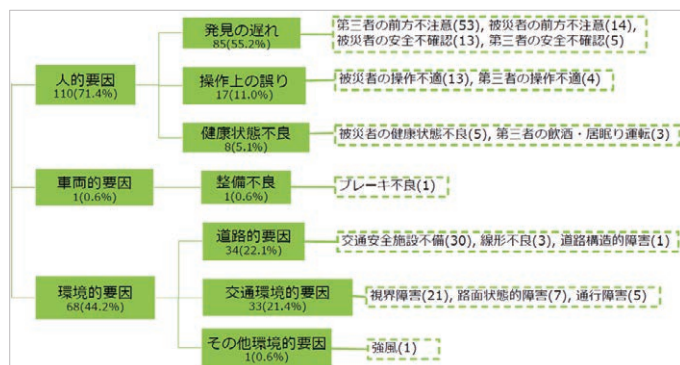
図表4 就業途上の重篤事故の発生状況と事故発生率

		n ( % )	事故発生率 <sup>2)</sup>
性別	男性	97 ( 63.0% )	0.019
	女性	57 ( 37.0% )	0.023
年齢階層	60-64歳	4 ( 2.6% )	0.004
	65-69歳	36 ( 23.4% )	0.015
	70-74歳	51 ( 33.1% )	0.021
	75-79歳	41 ( 26.6% )	0.030
	80歳以上	22 ( 14.3% )	0.040
在籍年数 <sup>1)</sup>	1年未満	9 ( 5.8% )	0.009
	1年以上 6年未満	50 ( 11.7% )	0.014
	6年以上 10年未満	47 ( 14.3% )	0.028
	10年以上	46 ( 37.0% )	0.032
	不明	2 ( 29.9% )	-
傷害の程度	6か月以上の入院	41 ( 26.6% )	0.005
	死亡	113 ( 73.4% )	0.015
被災者の交通手段	自転車	70 ( 45.5% )	-
	二輪車	32 ( 20.8% )	-
	歩行者	25 ( 15.6% )	-
	自動車(貨物車含む)	24 ( 15.6% )	-
	電車	2 ( 1.3% )	-
	不明	1 ( 0.6% )	-
事故の型	車両相互	54 ( 35.1% )	-
	出会い頭衝突	19 ( 12.3% )	-
	右左折時	11 ( 7.1% )	-
	正面衝突	4 ( 2.6% )	-
	追突	3 ( 1.9% )	-
	追抜追越時	1 ( 0.6% )	-
	すれ違い時	4 ( 2.6% )	-
	分類不可	14 ( 9.1% )	-
	車両単独	11 ( 7.1% )	-
	工作物衝突	5 ( 3.2% )	-
	転倒	10 ( 6.5% )	-
	路外逸脱	3 ( 1.9% )	-
	人対車両	1 ( 0.6% )	-
	横断中	9 ( 5.8% )	-
	通行中	4 ( 2.6% )	-
その他	1 ( 0.6% )	-	
人単独	9 ( 5.8% )	-	
転倒・転落	4 ( 2.6% )	-	
体調不良	1 ( 0.6% )	-	
その他(落下物)	1 ( 0.6% )	-	

1)事故発生日と入会日の差を算出。

2) 10年間に発生した重篤事故件数のSC会員千人当たりの年平均を示す。

図表5 就業途上の重篤事故の発生要因



## 【引用文献】

- 総務省:令和元年労働力調査年報。  
<https://www.stat.go.jp/data/roudou/report/2019/index.html>
- 石橋智昭.高齢者就労における事故と防止対策.老年社会学 2021;43(1):74-78.
- 厚生労働省,全国シルバー人材センター事業協会:シルバー人材センターの適正就業ガイドライン。  
[https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12602000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu\\_Roudouseisakutantou/shiryu7\\_2.pdf](https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12602000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Roudouseisakutantou/shiryu7_2.pdf)
- 公益社団法人全国シルバー人材センター事業協会. 令和元年度シルバー人材センター事業統計年報. 東京:NRI社会情報システム株式会社,2020.
- Lilley R, Jaye C, Davie G, Keeling S, Waters D, Egan R. Age-related patterns in work-related injury claims from older New Zealanders, 2009-2013: Implications of injury for an aging workforce. Accid Anal Prev 2018;110:86-92.
- 石橋智昭,森下久美,中村桃美. シルバー人材センター会員の加齢と就業:65~66歳会員の3時点10年間の変化. 老年社会科学 2020;42(3):209-216.
- Fraade-Blanar LA, Sears JM, Chan KCG, Thompson HJ, Crane PK, Ebel BE. Relating Older Workers' Injuries to the Mismatch between Physical Ability and Job Demands. J Occup Environ Med 2017;59(2):212-221.
- 厚生労働省:労働災害統計(平成30年)。  
[https://anzeninfo.mhlw.go.jp/user/anzen/tok/anst00\\_h30.htm](https://anzeninfo.mhlw.go.jp/user/anzen/tok/anst00_h30.htm)
- 総務省:平成30年労働力調査年報。  
<https://www.stat.go.jp/data/roudou/report/2018/index.html>
- 一般財団法人全日本交通安全協会:平成30年中の交通死亡事故の特徴。  
<https://www.jtsa.or.jp/topics/T-288.html>